陰八

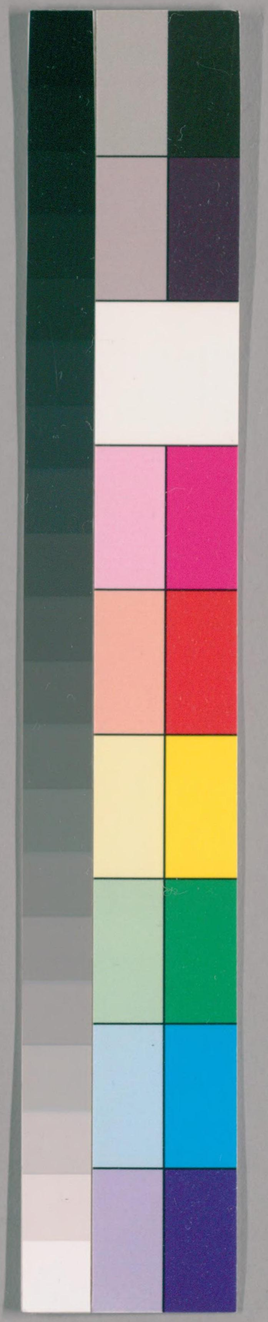
西鶴織留

世清人心

三

京 特別 6 204

東京圖書館
珍門 類 京函 七架 二〇四號 六冊



国立国会図書館　タイトル『西鶴織留 6巻』 請求記号 京-204

ガラス使用

No 19492/22

西鶴織留世農人心

東京圖書館藏

目録　三

一　弓手にあるべく程祖母
　　簒用なしの頼り手形
　　清前に正月乃あるべ

二　藝者ハ人をそしり此程
　　六月に重ふるも不思議にあらず
　　今れ世のちやり俳諧も一興

交換・明治三二三

国立国会図書館　タイトル『西鶴織留 6巻』 請求記号 京-204
ガラス使用

三

亀は南座の無分別

三夜懐れ手貴目志らぬ

かなしれ何乃うり物

四

何あく亀知恵れ振賣

毎年御老のたくられ男

猫の発れ手がわり

一

引手はなびく程松母

御代ちとせ山松は古今万葉の名所。春の風志行ふして

四川乃海に立波もなく。と本朝の風俗志ぞゆづり紫紙

黄山紙にしらう敷の子を黄海人までもしらんざし皆松家

になりて八百日の漢乃志例ハつさぬ道廣くがろゆさ

のなる時色より住めの美人仕合ぞうし。ちきぞ近年人

のわかりさ色をしらふにいづきか愚かなるは知りをなし。

むしハ十人寄きぞ皆抱毎にしとく。我身の上の事計を

埒明る者掃なり。両してや人おもす請ふ出入乃嘘ひ又

は内侍などに。三葉なるへく抱らくいふ人もなし。孫更云事

だくして箱なれるすと書出め。おもふ迷惑いたさせ我利欲

をなるす思ひもよらず。自然と義理なつまれの云分も一つく

あつまのまちに事付る筆ちんハ五町七丁のうちにもなき事
ありしに今時は拘らぬといふ男ハなく何るすまでも外の知恵
をかりす面くに詰ますと済さぬといふ事なし。是ゆへ
悪人も思ひ付人乃難義をかへりみるゞ。商賣あるひは
借銀の事ゆでも家性ひとりとハわさまへながら云ふ事の程と
うしらへ油銀のなりぬ人ごろや。ひまハ借請る金銀などに
こうふ乃お入まる事なし。子細ハそまくの家業に付一商ひ
もれぞうなり。ず利徳をゆるすとみ極め。此質のうちにそ
ふ際お意に借て思ひへの商賣の得ぞ。元利そろへ
済しなり。此程の人ハ何乃ふ別をせずにちじめる相談す
合無なく奢乃んより極奥下へつゝひ持る銀よりけまバ
此ゆへ出来なし。如まで借るに難儀をうけ云事の程と

他にもあれば吉無明日に御接おまぐれてもあまいなる
なし。あるへ人いかなる悪知恵をもけくとやくいふにして
借るゝ物一ぐびはそれぞれとく事なし。是をなりふに元日の
祝儀をまひ禱ぬぐといふや。又ふるらしの大所日を月日
乃立ハ今のなすと志ばしもけとるてるなれ。世に何がこ
ないぞといふに酒の酔を是をうけまだ別乃事なし。氣ち
がひのぬさる家繁揚まてあやゆちとせぬ物なり。お是あ
つまり。ぞ追はざにもなりぞ。なりひの所の欲をなる
まゝれバうちにもあハぬものなり。皆人この覚悟より
ある事の中にも。第一身体を持嚴して借錢こゝろ
ぞ。此を務しくなりしきぬ此所に又所し。ほてもくさ
ての世や分るに仕合ありて座遊も人なしくせし人のいふを

国立国会図書館　タイトル『西鶴織留 6巻』 請求記号 京-204

ガラス使用

そすいぶんと愚なるものまでも人皆耳をとゞめて安在けり
又もまた法の数なりくぐるとこれ人の一言に利のせまり
これ事をもつかも誰かまへ人の所ぐ前につきて口揚さ
るものこんまもなれ事にこそこゞかまぬ世代前者に業せ
人ハ人の金銀元祖せしほとりへを何んなく居ながまゝ又貧
しきを我と身をしてまづかが祖物ぬそだへも前のひんなゆる
せなかるとし。何程つとちぎに生れ付ても御づしれ人まれ
先より油断せどして。まえにまた合たる小だ見なぐを見ふ
見て元出しける此下人のまづしやてをく貧ましく
うき世に住める甲斐所しいなる前生れ編集にて
貧乏福乃ぬこれまた福者ハ御ひとりして法来り貧者
ハ新ふみそんかさなりぬるとそはまくなるぬ世上法凡

なに付聞に付うと御しぞ身仕合ハ町人よりまさに武家に
あるとかる事にしさ法大名がこに御吉例にて正月三日
の夜。大書院にて家久し記者ばかりめしまた寝門
と仰付しまたかるぶも母陽子乃内より五色の世話を教
百編なげ出して。まゝ母に一編づく。元此話乃す漢に付玉
し物代くこされたる小庭引出に縄に棄れ木の種木枝お
うし。家老職の人引出とも縄に銀銭一貫文あるいは尾銭
乃其物代引出とも。又ハ御物うしらへ服ざしかこれ
まは春田の物ゆる紀に元あくるを其挑手筈なるべきなる事籠
きんちゆく日傘。鉄子の長さふとん物りしやくしをこれもを
知り。兵黄金に引高。菓子防ぎハかうざけ其他のぬりしか
よそめ役の人より自然と目がゆれあるもなりしぞとりく

国立国会図書館　タイトル『西鶴織留 6巻』 請求記号 京-204
ガラス使用

の果報とうらかかつさ者の重さ物にて合ゆるに一人をな
ろうさ変り新例の年男とて八十六歳になれる
人をひれてことぶきを勤めるが我も物の数とて人まるせ
にえてくれる縄を引出しるに奥上臈の中にも梅恒のこ
やて都より吟味をおそにしおるせまゝる大ぬり袖をぐさ
も気づくと真紙にましけるに男然れ出し人絵も文をぬ
えけるが人のくれ縄より見ましてさぬく観察して引なり
者まとゞ大殿様乃時さ人古狸とゝかに呼し百三つまるる
祝毋を引出せば一度に来れたしめ乃大笑ひまて清掃
姫の上時老の酒より万歳ぶとそうさひ乃なり

二

藝者も人をそしてとの程
諸藝を組織すなりまくの家業の事ハぬうそ居
に入る事なかれ也古人乃言葉ぬとりしもあるに事所し。
唐士の鄒燕といふ人筆に五十年来の人紙にして七十
余歳にして妙を得たり六月に冬れ個子を妙きて唐帝
に霜をふらし。第人此音律に同神よ得これしけるがくの
ごとく学のびゆて経なり世紙にしたりしに身の一大事乃
先輩もなく子孫に伝へ難くなりけるの極示何れ益なし。
此事先道人我朝の果ん居士ともうが伎術の法ハ飛ぶん
きとひ。五月にもまんして何ぞ世乃毒をけ身のあに
もならば人間の第一も筆道挑灯の好学文のあるに
今の世の人ん分限相應より高きと成り鞠場の都陰に

日を暮し九機一流に至るまでかきけぞとして別の事なし。
聞き取れる挑灯もしるせて鞍に行れる海へはこゆらぬ物也。
弱又揚弓官女の業なりいかにしても大男の願ふるすなれ
然るしなれまで諸職人の趣語を持てるほどは仙合す
よし又百箇なりしあつもあるひは大合書の宿板より
付てうら何。此矢自然乃時の用に立せあく盗人を射
めるにもあらば看引機にあてて更にもとろく事なし
十炷香をいよく福徳をなれば隣人の芝車にそひ
是皮多の鼻あく食乃こげるを同出し。谷の下の薪を
むかす鍋を始末の糧にも如そうし。葉の湯は道具より
あよれは用く貪ちの成がうし。万事あるにまうせて
俺ならばよしといひ傳へつゝ是利体の言葉にもせよ貪ちの

まてハ行もし後からずこのあるに宿にして物好をよび
ろかまへよいこ殺る事ぞうし。志しし世に任めるからハ
功者乃中程に居て人並に吾ほどの事ハ知る者し。又能
なやし孔子成なるまで傳更してぞ何を更にあるまで
素人藝には用なし。耳ちかれこうるひ見えて近年の
猿言ぶるまひの間にあハせんぞ流事なり。地狂言を
子にも時也。難乃なへらなにかうら雇なる者ハ大いうけ
けれ海法してアルる人汗とかれるに此男の母親なり
養者ハ立花を交沛の跡かこ乃法手業なり。地色を
こき田夏の草の毛取くをかんぬ人乃ちあに深山木の
松柏志を人乃まにかるを集めくあそばされしに世
年いつまも奏るんより用持せば継本の様をもさられ

碎撥乃梅もとれを引切男地の荷葉と折也神山の樹紙
とりよせ家内のかるまひ茶水んなさけしをおりむ茶の
うらみも深かなをし是只一日の顔あ世乃霞なり藏又
小商人の碁の碁侍の三味線町人の茶法出る外の淨瑠
利百性の諸礼ぐこ是皆よし是世なり此新あまこまで
されば和歌も和鳥の風俗にてうくひす蛙まてをそう
声をすぐこなりぬくんや生なる人の此んざしなくてを
をかしす所に連歌の捷をゆるせにて俳諧といふもあまた
哥道の一種なり世をしの世を隙になを人あるひは
神主又は武士のもてあそびにして嗜ある代ちの者
ま世上にはやつとさ人のめしつかひの小者下女までもいこ
さぬといふすなし。地して藝をすす濃くのまに渡

まで抱きつゝあめしまで是月の俳諧師は哥出と大かたに
みたり。道しほ人は礼式を望ひ貴人法体の下府は。
諸事家道の下知にまかせてんぶ所とあまたく自然と祝
意は叶ひぬ。いつまれ連歌をもてはよ給しれ付句をいふされ
時は座中肝はめいし我をおぼえを同音に参て拍扇
乃たしに半付ぬる人は是を申せけるまゝ点者の書して
清かしまるに。そこの点者は百韻一句く申ことを報出に
して明白や又作者も俳諧のわきまへおけてずうしぬさし
合同字入ぬとしの吟味紙とげて。あがひの難めまゝ
ぬ。今時の点者といふ紙これだきおふまて馬は生れなれ
ぬとか。牛は闇に二句嫌ふかとしろ。ひ草口から四枚
も笑へぬ者が。菓子袋より押やうが取料をもしらへ

軒号にむかりさせ。一句一銭の点者は讀ぬ所は評出なしに
付罵し。麻のうちうしに取紙ふ為紙志ぞ。其馬は湯は取
色はかるすを。暗は俳諧やし馬は連歌やう。何を知とけ
ゆ分家事なし。作者庶人なれたこそ其所に濟ずな
ま。此点者は如て詩書は名紙志しるて程の人は先女達を
居て八百八品のさし合を中に笑へ。是より見合久慶は商
座乃了筭かざりまゝさあぞうし。かりそめながら此程の家
道を達せめく。座振がとも見習ひ給へ。此俳諧のかゝへ
任音へ系詣しまふとも。祝は見也しまいぢんから。所
とも明さ俳諧師がまいつゝと清興をかせ給ひて請
まふ所じ。此時の一座見るにあまへ人は句をいふしても
氣は入らぬ。思つきして居たとのまぐらかゝぬ句を

国立国会図書館　タイトル『西鶴織留 6巻』 請求記号 京-204
ガラス使用

いさせる時乃ことあなり。板下座より家道をさしとき
平連歌より出し合の吟味見法よりきき事なり
つゝくれ玉ふ上点ハ悪ましして法乃なれゆへなり。
作者の貪婪にかまつぞ由ことばさぐくを由ことの家道
なり。まことに和奇なりしそれなる俳諧さへかくもとゝ
ゆきぞ由してやれの法蘊れ師道も見よりぞ人
てしるべし。ぢりとてそうしとるて今うとてれ人の
よはなれ物

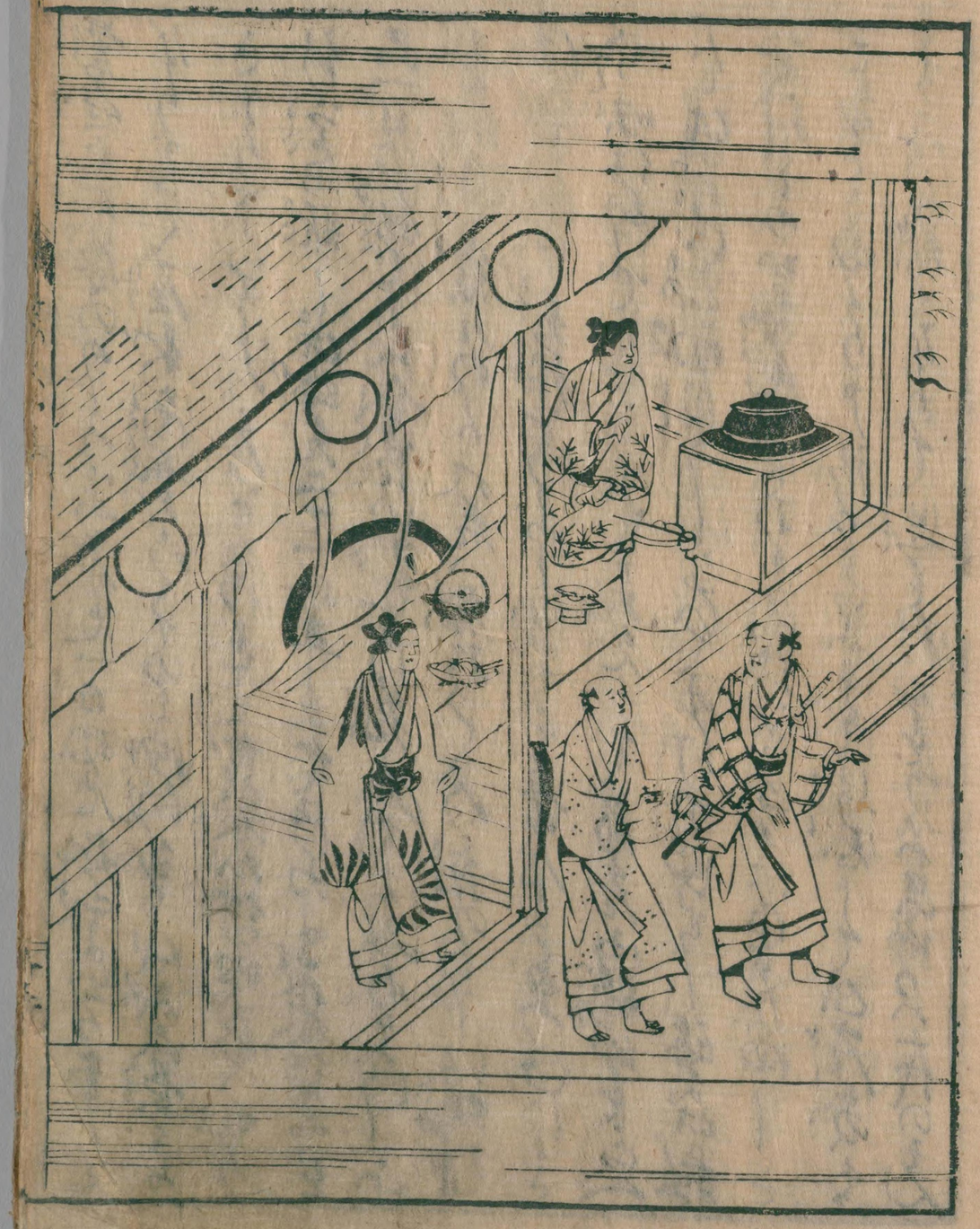
三

色は南座乃無分別

人間一日乃極楽あけぞのに望じ夕ゆ死をたゞへも
夢れかり花よ法門に人代掛を中にも極悪のたゞれ
は和漢に古今やむ事は楓橋の夜泊に鐘響を
既翌うさなりして座人がとさけば和鶴乃文里都乃
鴻原にうくふなげ卿に同じ。死なざやむまいと思のしかいづ
きまして息の通ふうちハ中く人の美人我分別まてを
無り難し。法虫を所くれ極女に浮ざされ身体を清ぶし
さぬく乃難義にあへ法を眼おにしんぬよぶるを数限里
も過がる事皆人の身れとのやうに覚へて一日暮し
に極びてまた程ハうちつもらんと過がる所程ハ俳集めてつゝひ
極諦へも先へもうごゝぬ時石車を銀にして法しを知ふ

に思ひぞかゆかずして。自然とと海へねぐなりぬ。菊尾にし
なりて。後里かゝひとやめけり。其時は男の魂ぬといふ脇
指一緣を取て。抱のんるまゝ身を左縁にて。おさめけるを
たりし。ちまぐ人月一生のうちに一ぶびは傾城ぐるひに乱
さぬといふ事。詞り過。行とぞ。なりしろさ中程にて神
佛の御ひかへあれば。此指具を屋めさせ給へば居宅も賣
拂し。商賣抱も小作めして。後世よ五つぐ身を持たく
そこらきけまぐ。町内世月の人親類のも濟くまでも
今こそ美氣とり。笑してゆるしぬ。人としてつし
むべきは此道と更いふまでも過ぎしかし。親仁達が諸書に
此事を拂しぬ。其時雅波の御に二代つゞきて隠き所さ人
銀が銀をもうけし。夜警人世代出して。親仁も警行に後

事にかゝらず。結付に後家業づくりして。時々に分限に成て前
のうち紀太夏殿とも求めて。此宿望ばかり三十貫目一年に
えてたゞおのうちに性が異と貫目。此さくとく其ほ八十石
おさめ。賊寶を銀三千貫目無能に相濟し。其濟くの器
は世月しり。然ひぬ程に身体をもけらせよと。半年八一枚に
して此親仁をお果らまたり。此雖も親のんぐしにまさ
まて。其に志りさ生れ付。又歳の長。其物の袴を我まり
けて皺延して。たりふまに無き。むふ事くの箱のもぐる
を横に紙に包てうしけり。是より親もあんどして一生身
を持そこなふ者にあらずと。まれどもにも來く毎のもしく
いひ後されよいよく十七八の此世の人に警りて菊角が
へ御ゞつるまなく。義理をうさて二兩ゝ所る無用ばかりして



国立国会図書館　タイトル『西鶴織留 6巻』 請求記号 京-204

ガラス使用

驚せざる事のめしつゝ者も一日物見拵山に出る事も
なりがたく。屋東商賣乃るものゝ油汚なく此家も長くな
さまり申とよろこびかたぶきまで世の人公何時と聞く驚り
行定め難し。此跡元二十一の年まで浮ねる事も其を
只一日の慰ミまゝ金銀の數を門前にへてよみあそびしに
まゝ時草履もあがりの若い者わくの氣のぞしに蜆川
にあそび巾着銀をつゝみとゆきて茶屋に毎つ口ゆさ
吟味仕事してことくしも異ゑんして。爲産に勝出せとゝ
ぞ此事いたい面目しないてあげて物ゆし跡に此氣
をしらぬお首尾ハらもわき酒代をうずに取ざり申しさ
こなさゝ母より申張るといふまでも此度家を
まゝは立難くなりて。迷ひ銀出をうゝハ只神ハ一代のそん

とも別極めて此男。ちじめて分わる女の手にわたりし後さ和
さらぬ事ノ見へ見ざるより毎日加ふる程に出合がしらに貧なる
右敵が付て。風呂屋者ハすゝめ見もさきし紀所ありとて。
をし出して十五女ハと紫物又名別とわりの時兎のミあ和子
目に志ミ又ハ志りあるの付くる衣裳も。後ハ氣の付わ迷
天職のゆゑ所ゆ道中を見んて。又見ハ此拵し
ゆゑに奢つきて。人もかゝ此ハ程の笑手になきだ
ちや天神なぞ。ぬぐるくなりしく。左夫職になりして此者に
志やまる御ぞ揚屋の下く。ぬでも。如ゆゑ所へ手れ切せられ
ぐわらるしくと嬉しがらせ。左夫を手に入自慢して外の男
をせきて金銀の費をうぬつず。無理なる口舌を仕出し
ても一度もまゝるといふ事あし。世男廣しとも世ども

我よりもとわ賞手ありぐわそらくていせぬとうぐ。今日
うら十万日までも性に積れば大ぶん今の世の清の字の
家ぞ子細ハ若ふて無事で銀を持て親がなふて其身利
發で志もふなまふく。情が如くて酒のまいで一年中隆
で何が知らぬ事なし。揚銭ハ先銀わたして賞海もう。
如これ毎ハ所つとなしに毎日なりとも清おなさるゝ。清
閑鏡の所用ハ何程までも是の内義にや付ておきます。
和の古夫なれハ師走の世間ハ日はまて正月の男のなりすを
ゝ所に迎を拘まなるゝ男のうゝ人まで積ぐ酒のとがるゝ
程の事やらましにそんな事ハ計りもくにせば皆我に打
海の殺いそがぬすを各うら来年の盆の踊ゆうを深
させ蔵の貴の袷のもなうまで清や付なるゝ所を作

好きの通り京都へ申つかしけり。是程無しう所る事ハ
眠さくと目代明て[illegible]情む魚をなされたがは。かゝを酒の
吟味でのまされくとがまはなるゝぬす。京をもすうしハ
氣代つまて家のうちに鰭の饒物是ハ八九月の比なし
つとを喰て世にぬるし。さやくしであてがゝる家とは
義ふ色し。近付分義と見えすきゝる人の後日に出ます
といふ我宿屋清兵用と毎く。酒吸物を喰まそんなして
海し給ふ人と同じ口にハ迷惑なり。又女ハ家賃ハ無て
借ふる銀で貴重を拂ひと付てもらひ給ふもんのようハ
ない事。陸ぶんならしてこれ給へ誰にあそれぞ此里の銀と
子貴目までも我宿で拂ふ大ぶんにて我にかゝるまハ所産る
まいと。おもふ海なるまいふにも銀がかゝる銀の世をこわ。

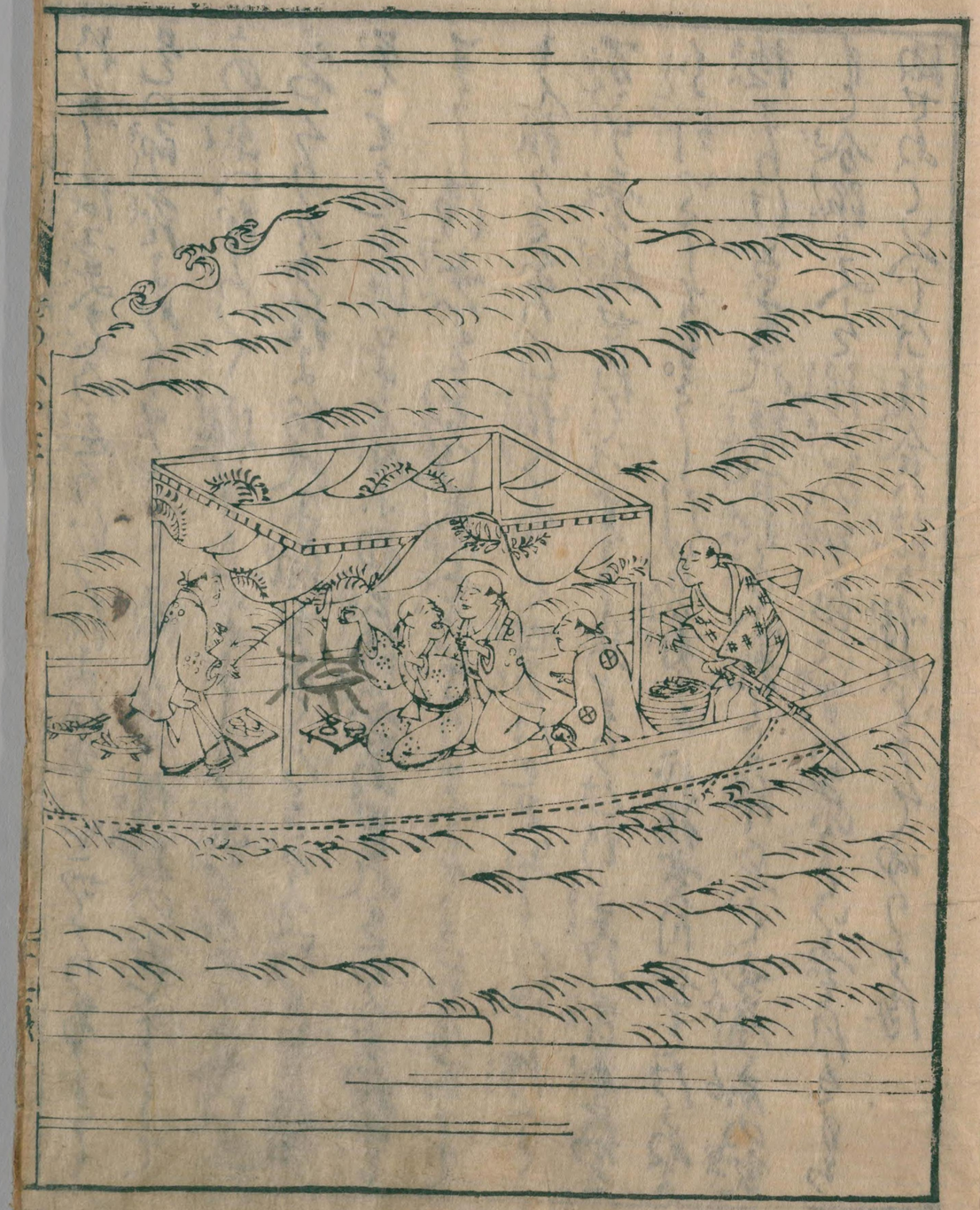
皆清をしてうゑ多くあまりくしに。此道に奢まだはかれ
ゆく物かれ十四五年見たらぶらちにいりなく百錢も持
らず。是程まではようもくつひ捨ひ有しハ人を鄭
ひしが今身の上を長町にかげ口也。其火せんかうして
朝夕の餘ほそく此とりの母よりまゐ賀稀とうらし
嫌なまけもなれ下へなれ云に出し。元祭祀とうましく
志のびくまたし女ぞくひして。来ん世ゆくまゐ月の法
よし原町の五分女よ帰ゑ所といふべきよ大拵揚りに人
乃見しほもかゝ我もむしハ目に一絶つて下等かれ人
に後男。今古書をめんもたゞしかしど人ハ志れぬものよ。
あなづり給ふなとあふれかる。此とりの此ゆく女ぞ乃
なれ乃果此男づりまはかぎ候

口

何まてを知恵の振賣
大海乃底に尾閭といふ穴あり。読川の水日々夜くよ
入まどを投穴のうちあく失ひるがゆへに増事ならに
なし。人間に此とりの口ゆゑ此尾閭のごとし。一生のうち
朝夕吟物かぎりもなし。伊るとて八百八尺そまくまそな
りなし家織に油砂するましなりまし。今時ハ正直をかけて
其身の骨をくたけど天理に叶ひそまくの後世にさ
ぬといふなり。此じて諸国の城下又ハ入舟の湊なれは
人乃見くまかけまて。ぬまくすぎまひ乃程もあるぞ也。
されど山城の伏見の里に七八十年もみんなかびしに通り
絶の繰くそむかしたんじやうの時の町並ゆるて分く
に物の淋しくなりて何高賣するとも志まじ年月を

れらるものを頼まれ是をおもふに子軒あまで反るこ
ぞかし。近年は人のんさうしなりて大かされてそれまで
は中く身をよ難し。すぎし年は師走に竈の蓋
と仕ふまつるとまゝまつしのよれ申と思ひしに又とし
蓋には達しんなる男が釜みがきにありきなる。大釜又多
まれは大小によらずと武文づゝや又候茶ゆゝひ貸き申武文
ゆく坂の帰るゝ。年前に人とりこぬ志を獨まし。また
義具屋の隣なる細工人とるんして定木竹屋らたけ棚を
と持て。お庶家の獨張一月とき多おうと障子一枚二多
何り折りて是を多まてさうじ西でいてしける。年迄棚
を賞けまで弱木釘まで持きたりく。えん方をあらくあ
弱て帰りぬ。何あくを自徒なる世時になりける。是ゆゝ

世事は事りて中より下れ人乃こゝ先まもなりぬ又又十
ばかりの男風呂女とうこにかけて。猫乃蚤をゑまきしを
辞立て西ゆりけるに隠居がこれ白三毛をかゝ西がらるゝ
人をれとて頼まれなるに一走三多づゝに極め名誉に乞ける。
先猫に湯をかけて洗ひぬまゝ身とき西ゝ猫の皮に
洗みて志ばし掛きたるゆゝちに蚤どもぬまたる所
とうこそばらも皆あふるゝ皮に稱りけるを大道へ入る
ひ捨ゝ後。是程の事にをそもく何としてかゝ別仕
身るゝ程とはなるまぬ今程諸人かしこく物云ばしく
合点をする世乃中に年がまへなる男子細らしく小姓猫
に大巾志さげて皮立身と差て何よりかゝ世乃に合点
乃ゆゝぬるゝあらば間て乃弱人乃身上にしかし

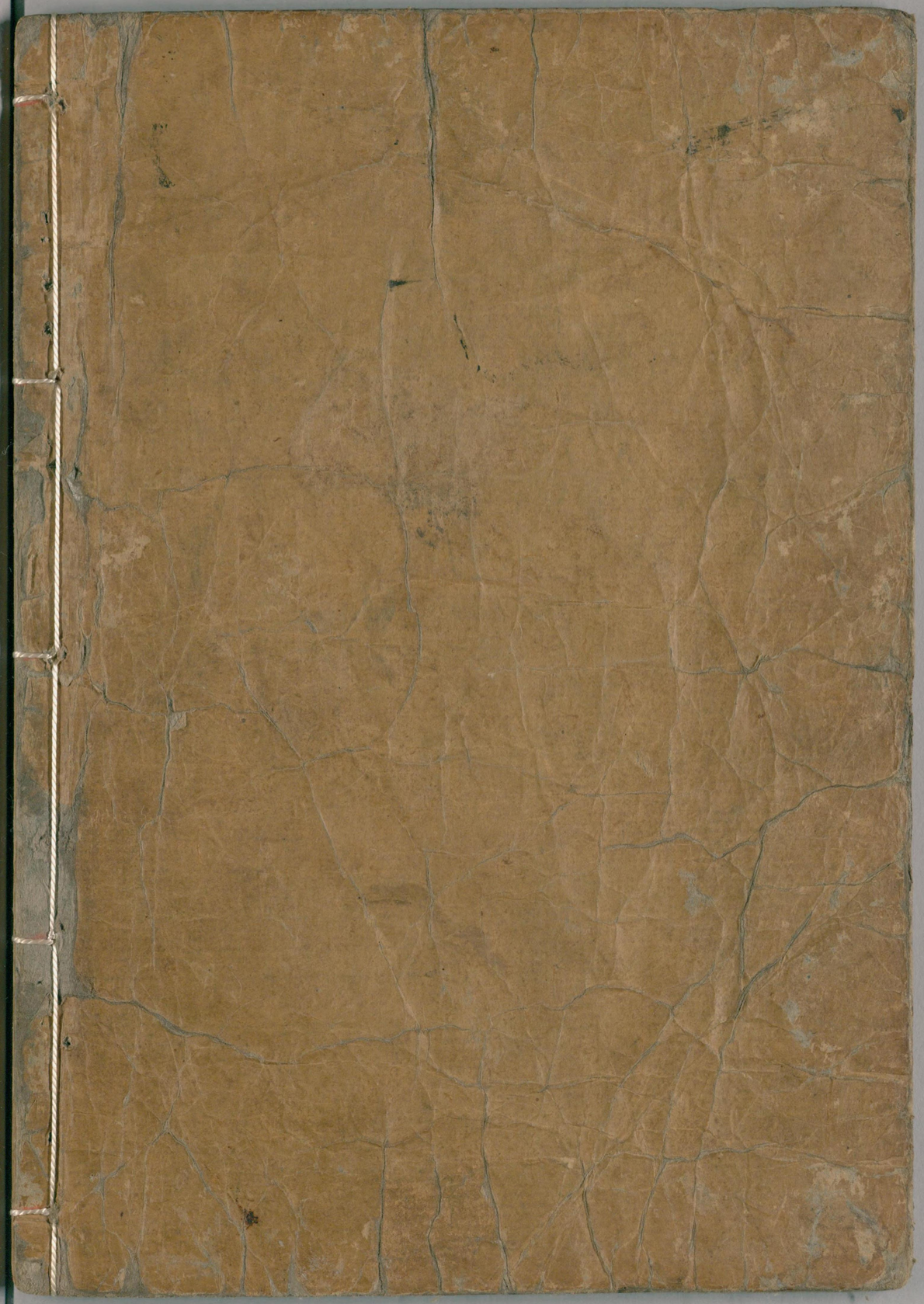


さ事れ談合相手に放置しと口廻くいひ海りぬ心
を人を耳にも安いまだと大きな人を肝つ腐しく
いかなる虎蔵大明神れ母とし子あくもあるらんと法
らく魚を諦めけるすぎあし秋乃法三郎屋川只砂
魚鍋来にあり人酒に乱まて投鍋ろうとせ成丸焼に
して救吟をもとがらにおろくあれなる中にも。子
更一迄一口にせし人縁に咽をつましめ多く。是ハいかにと見
海に此砂魚れ腹に二すづりれ糸付て鍋針あるを咽
に立ち海くしてもぬけの事ハ行く。此難義もべきなうな
く船中鞍三味線も鳴をやめてつまくに手持せし
法師のあしうなへれどく迷惑して命もあぶなく宿
に帰り繋師に見せくもんどくぶとやかく如候もろ

京 特別 6 204

18/11/37

わかし後工夫志乃返りける程に。此事をかくりあまだ
是ハ即座にぬくるすぞとこゝ海なる珠数の玉をとらさて
その糸へ引ちつく通しかけて。其後糸をもあて志げかに
志やくりなる程に何れ子細もなくぬさなるいづまも此戈
笑をとんじける。其座にぬ云場悪せぬ男れまなるが我にも
すこし清無まで。[illegible]商賣をしまへまて立所居所まて
そん報なさなり。此様子をみて世間にを見あらひ此の傳へく
万事賣掛せれど。此事にもづまり此り先れ其事何と
分別いたしてもさしし引算用して武格賣目余をたらぬに
極まりける家れ談合おもふ様にこれといへど。女房所の親
もと分張ゝ又は報物の出家に事ハなりといふぞれなるもち
海せぬといへど。此談合ハ埒が明ぬとまて帰りなる海



国立国会図書館　　タイトル『西鶴織留 6巻』 請求記号 京-204

ガラス使用